
船長は恋がしたい

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

船長は恋がしたい

【Nコード】

N6734T

【作者名】

28号

【あらすじ】

魔法と冒険に満ちた7つの海が広がる世界。

航海士のリードは、船長のとある欠点と自身が抱えた秘密に頭を悩ませていた――。

くすびばる内『先生、修行がしたいです』コミュニティお題より作成。

お題である【海賊】の他

【異世界トリップ】【駄目なおっさん】等やりたいこと詰め込み連

載
で
す
ゝ

1 右手が大惨事

目が覚めると、右腕がかぎ爪になっていた。

「お目覚めですかキャプテン」

優秀な副官の声に、視線を動かせば、寝起きに見ると思わずキスしたくなるほど美しい顔がそこにある。男であることが非常に惜しい彼は、この船で最も優秀な若者、リード航海士である。

「リード君」

「何でしょうキャプテン」

「右手首から先が、かぎ爪になっているんだが」

「鍛冶の国の職人に作らせた特注品です。内部には毒もしこんでありますので、暗殺にも使える優れものです」

真面目な顔で説明され、キャプテンことカインⅡモーガンはかぎ爪を体から離れた。

そのとき、彼の寝ていた船室の扉が乱暴に開かれた。

そこからなだれ込んできたのは彼の部下。誰もが小汚く人相が悪いのは、カインが海賊のキャプテンであるからだ。

「キャプテンが目覚めたぞ！」

「さすが、あの剣豪とやり合った後なのにピンピンしてやがる！」
ピンピンはしていない。何せ右手がかぎ爪である。

「おお、その右手格好いいですね！」

「キャプテンって言う感じだな！」

「ますます箔がつくな！」

そういつて大喜びする部下達。

それを見ていたカインは、かぎ爪で側にあった枕をビリビリに引き裂いた。

舞い上がる羽毛に怯える部下達。

その向こうでキャプテンカインは…

「馬鹿野郎！こんなんじゃ、余計女の子にモテないじゃないか！」

猛烈に泣いていた。

船内の誰よりも強面の顔に涙をたたえ、キャプテンは泣いていた。「来週でもう35なんだぞ！ それなのにこんな！ こんな右手でどうやって彼女を作れと！」

魔法と冒険に満ちた7つの海。

そこに名をはせる凄腕の大海賊は、強面故に未だ童貞だった。

2 大海賊はパン屋の息子

キャプテンカインと言えば、知らぬ者はいない大海賊である。

7つの海をまたにかけ、魔法帆船バルバトス号で暴れ回る海賊の中の海賊だ。

今まで見付けた宝は星の数。今まで殺してきたライバルも星の数。今までに抱いてきた女も星の数。

と世間一般では言われている。

しかしそれは事実ではない。

もちろん真実もあるが、ことさら女性関係においてその噂は真実と一致しない。

カイルは幼い頃から強面だった。それ故女にもてない悲しい青春時代を送り、本当は父親のパン屋を継ぐところ、あまりの強面に海賊と勘違いされ逮捕されたあげく、牢屋にいる荒くれ者達を連れて脱走したことから海賊となった不運な人物だ。

彼自身は未だに自分をパン屋の息子だと言い張っているが、こんな顔のパン屋に客が来るはずもないのである意味運が良かったとも言える。

またパンをこねるために日夜鍛えた腕力は誰にも適わず、たまたま牢屋で出会った剣の達人から学んだ剣術は、もはや達人の域である。

本人はいつか自分のパン屋を持ったとき、強盗に負けないようにと習ったつもりだが、強盗の撃退だけならその顔だけで十分である。そのうえ、パンに関して勉強をするために覚えた読み書きのお陰で航海術の本も難なく読みこなした彼は、魔法帆船の扱いも一級だ。人魚の入り江や、暗黒の海域でも平気で船を乗り回すその腕は、船乗りの間では伝説。

しかし本人は「いつか自分の焼いたパンを世界中に配達したい」と言う願いのために学んだと言い張っている。

だが結局、パン屋に戻れぬまますでに20年。

さすがに彼も、もうパン屋を開けないのではと思い始めている。思い始めてはいるが、だからといって大海賊になりたいわけではない。もちろん宝探しは好きだ。昔から海賊物の小説は好きだった。けれどだからといってみんなに恐れられる海賊になりたいわけではない。むしろ愛されたい。特に若い女の子に。

顔は強面、戦いになれば鬼のように強い。だがカインの恋愛観は、12の女の子よりもピュアだった。

3 メアリーちゃん17歳

「かぎ爪ってなんだよお。せめて義手にしろよお」

ラム酒を片手にうめくカイン。彼に付き合っているのはリードと、カインの剣の師匠であるエドである。

付き合っていると言っても、エドはボケ老人に片足を突っ込んでいるので、聞いているかは微妙だ。

最近、ご飯を食べたことすらたまに忘れる老人に人をなぐさめるスキルはない。たぶん、ラム酒を飲みたいから側にいるだけである。仕方なく、呆れ顔でカインをなぐさめているのはリードだ。

「多数決で決まったんだから仕方ないでしょう」

「多数決って何だよお」

「みんなが、キャプテンにはこれが似合うって」

「こんな手で、どうやって女の子と手を繋ぐんだよ!」

せめてそこは「抱く」と言って欲しいところだが、ピュアなキャプテンは言語センスもピュアなので仕方がない。

「ご自分が思っている以上に、あなたは異性にモテています。街に行けばあなたに抱かれたい女達は沢山いる」

「娼婦とかだろ。俺と寝れば箔がつくとかいわれたことある」

「いい年なんだし、そろそろそこら辺で手を打っておきましようよ」

「初めては、好きな子としたいの! 俺は!」

「そう言ってもう35じゃないですか」

がんと音がして、カインが頭から机に突っ伏した。

「正直、35で童貞はどうかと思います」

「愛のない行為なんて俺は嫌だ!」

「いいじゃないですか、気持ちよければ」

自分より15も年下の美青年の言葉に、カインは若干の殺意を覚える。

「顔が良い奴は、顔が良い奴はこれだから……」

「キャプテンだって悪いわけではないと思います。眉間の傷と人を殺せそうなキツイ眼差しは、一部のマニアには受けてるか」と

「俺はね、外見だけじゃなくて心ごと愛してくれる優しい優しい女の子と恋がしたいの。朝起きるとエプロン姿で東方の国のスープを…」

「味噌汁、と言う奴ですか」

「そうそう、それを作ってくれるような素敵女子と結婚したい!」

「味噌汁なら俺が作ってあげますから、とりあえず娼婦で手を打ちましょう」

「何でそうなるんだよ!」

「あなたが童貞だなんて、この船の名に傷がつきます」

「安心しろ、町中で俺は童貞だと叫んだことがあるが誰も信じなかった」

まあこの顔で童貞はないかと、リードも思う。けれど、だからといって、大海賊カインⅡモーガンをいつまでも童貞のままにしておく訳にもいかない。

「それに、あなたの考えるような乙女がいるとは思えません。いても、海賊に興味を持つとも思えません」

とリードが言えば、カインが不敵に笑う。

「一人だけいる」

「まさか……」

笑いながらカインが懷から出したのは、ピンク色の可愛い封筒に入った手紙だ。

「メアリーちゃんだ!」

メアリーちゃん。それは1年ほど前から彼と文通をしている17歳の女性である。

手紙越しなら怖がられることがないと気付いたカインが、文通幹旋会社のある『騎士の国』にまで乗り込んだのは、大海賊カインの武勇伝その685番として今や伝説となっている。

騎士の国の何千という騎士をやり過ぎ、
「文通相手を紹介して

ください！」と幹旋会社に乗り込んだカインはさすがだ。もちろん乗り込んだ理由と文通関連の情報はカインが華麗に抹消したが。

そしてそこで紹介して貰ったのがメアリーちゃんである。

もちろんメアリーちゃんはカインが誰だか知らない。カインもメアリーちゃんの素性は知らない。

だが文通は既に1年も続いており、その中でも良好だ。

「また来たんですか」

「今回も無事、『恋のお手紙配達♪イルカさん』が届けてくれたぞ！」

『恋のお手紙配達♪イルカさん』とは、文通幹旋業者が使う特別な配達動物だ。

7つの海に囲まれたこの世界は陸地が少なく、多くの人々は海上の船上都市や小島に居を構えている。

それ故文通も遠距離が普通。そのため、文や物資を届ける運送系の会社は魔法によって調教された動物やドラゴンを使って配達を行う。

とはいえそのネーミングセンスはどうかと、強面のキャプテンの口から零れたファンシーな名前にリードはため息を重ねる。

「得体の知れない文通相手のどこが良いんですか」

「メアリーちゃんは可愛いんだぞ！俺への手紙にいつもハートマークとか付けてくれるんだぞ！」

とニヤニヤしながらカインは手紙を開く。

本当にだらしない顔だとウンザリするリード。だが突然、カインは再び机に頭からダイブした。

「どうしました、振られましたか？」

「め、メアリーちゃんが……」

真っ青な顔で手紙をリードに突きつけるカイン。その顔は、またもや涙に濡れていた。

「メアリーちゃんが俺に会いたって！」

「良かったですね」

「いいわけあるか！ 右手がこんな何だぞ！」

「格好いい格好いい」

心にもない声で適当にあしらわれ、カインは頭を抱える。

「どうしよう、こんな腕じゃあ海賊だってばれちまう」

「腕があっても隠しようがないと思いますが」

至る所に手配所が貼られている強面である、今更あがいてもどうしようもない。

「バレるのが嫌なら、会うのをやめたらどうでしょう」

「そうだよな、ここであればたら……」

「いかん！」

そこで、今まで会話に参加しなかったエドが突然立ち上がる！

「愛は、かぎ爪をも受け入れる！ 愛しているならゆけ、そして奪え！」

「エドじいさん……」

とカインはなにやら感慨を受けたようだが、リードは白い目で二人を見ている。

「大海賊カインⅡモーガン！ いまこそ！ いまこそ男になるときだ！」

「お、おう！」

「もっと大きな声で！ はい！」

「おおおう！」

「もっとだ！」

燃え上がる二人と、二人から距離くリード。

「あほらし」

もちろん、その言葉は恋の炎に当てられた大海賊には聞こえない。

3 メアリーちゃん17歳（後書き）

※9／4 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）

4 今こそ男になるとき

会いたい。

その一言が書かれた手紙をもらってから2週間後、カインは騎士の国の裏港に来ていた。

騎士の手の届かない、国外れ。断崖絶壁に挟まれた細い運河の奥にあるその裏港は、海賊御用達の隠れ港である。

メアリーちゃんと会うことになっていたのは、裏港と市街地の間にある古い教会だった。

「いきなり教会とか、ちょっと狙いすぎかな」

スーツに着替えながらだらしなく笑うカインを、リードは至極どうでも良さそうな顔で無視する。

「でも、町娘がこんな夜中に教会まで来るのでしょうか」

「愛があるからな」

「実は、何かの罠だったりして」

カインのネクタイを直していたリードの頭に、鈍い衝撃が落ちる。痛みで顔を上げると、そこにあるのはカインの拳骨だ。

「惚れた女は信じる。それが男ってもんだ」

「女に惚れられたことはないくせに」

「関係ない！」

そう言うのと、カインはかぎ爪の毒を抜いた。

「まあ、こうすればハンガー変わりですって言えるだろう」

「無理があると思います。それにいざというとき…」

「リード」

年下の副官をたしなめつつ、カインは微笑む。

「いざと言うことはない。それにもしあったとしても、お前がいりゃあ大丈夫だろ？」

「あなたの事なんて助けませんよ」

「しってるよ」

じゃあ後はよろしく、とカインは船室を出て行く。

甲板に出れば、そこには整列した船員達の姿。

荒くれ者で顔も体臭も酷い奴らばかりだが、キャプテンへの信頼はみな熱い。

「今度こそ、可愛い女の子連れてきてくださいよ！」

気の良い部下達に励まされ、カインは景気づけに腰の剣を高く放る。

「今日の俺は素敵なおジャントルだ。そいつを頼むぜ」

丸腰なんて男らしい！

さすがキャプテン！

部下達の歓声をせに、キャプテンカインは恋の一步を踏み出した。

5 優秀な副官に感謝

「で、見事に振られた感想は？」

目の前に立つリードに、カインはうめく。

「船長をいじめるな！」

「船長悪くねえ！」

カインを囲み、そう怒鳴る船員達。

「あなた達、この状況でよくそんなこと言ってられますね」

そんな彼らと、リードの間にあるのは鉄格子だ。ちなみにその鉄格子があるのは騎士の国の王城の地下である。

「振られてねえ……」

「じゃあ、騙されたと言えはいですか？」

リードの言葉をカインは否定出来ない。なぜならそれが事実だからだ。

待ち合わせの教会で待っていたのは、騎士の国の騎士約100人。それを率いていたのはカインの宿敵である、将軍フランスだった。

フランス＝リチャーズ。

彼はもう10年もカイン逮捕のために、彼を追いかけている騎士の国の将軍である。

今まで彼とは幾度もやり合ってきた。剣や海戦、一度だけ女性を取り合ったこともあった。そしてカインが負けたのはこれが一度きりである。

だがその歴史をついにフランスは塗り変えた。

「阿呆阿呆と思っていたが、ここまでの阿呆は見たことがないわ！」
メアリーちゃんと同じピンクの封筒を持って高笑いをしていたフランスを見たとき、カインはもはや抵抗する気力もなかった。

目の前で告げられる勝利の口上も聞こえず、ただメアリーちゃんがそこにいないという事実には彼は酷く打ちのめされたのだ。

そしてカインの部下達も仲良く捕まり、今はこうして地下牢に仲良く閉じこめられている。

「ともかくここを開けます」

さすがリードと沸き立つ海賊達。それを五月蠅いと叱咤しつつ、リードは手際よく鍵を開け、仲間を逃がしていく。

「さあ、キャプテンも」

最後まで残っているカインに声をかければ、カインは拗ねた顔で寝台にごろりと横になる。

「メアリーちゃんがない人生なんて」

「わかりました、じゃあここにいてください」

「おい！ そこは『きつとキャプテンには他に運命の人がいるんですよ』って励ますところだぞ！」

「めんどくさいです」

と立ち去りかけたリードの体に、抱きつくカイン。

その直後、カインの世界が反転した。

「よるな変態童貞！」

真っ赤になって怒り出すリードをみて、カインは殴り倒されたことによりやく気付いた。

「遊びはここまでです。これ以上ふざけたら、本気で置いていきますから」

と言いながら、リードはすでに歩き出している。

その背中を見て、それから先ほどリードに抱きついた腕に目を落とすカイン。

「あいつ、意外と筋肉ねえな」

というか、妙にやわっこかったなと思いつつカインは立ち上がる。今回の札に、自分の使っている筋力トレーニンググッズをプレゼントしてやろう。そんなどうでも良いことを思いながら、カインはリードの後を追った。

6 長い上にクサイ遺言

『大海賊カインⅡモーガンの華麗な脱走激』

一面に大きく取り上げられたカインの顔を満足げに見つめつつ、リードは新聞を手に船長室に入る。

見れば、相変わらずメアリーちゃんショックから立ち直っていない船長の骸がそこにはあった。

笑みを呆れ顔に変え、リードは後ろ手にドアを閉める。

「今回もニュースになっていますよ」

カインの前に新聞を置いてはみるが、ぴくりとも動かない。

「キャプテン、そろそろ次の寄港地を決めない」と

「……」

トンと音がして、カインが側に置かれた地図に手を載せる。

指さされたのは死の海域の向こうにある、人魚の国だ。

こんな状況のカインでは、到底乗り切れる海ではない。

「自殺しに行くつもりですか」

「……」

船長室に響くカインのすすり泣きに、リードは思わず天を仰いだ。本当に面倒くさい。とことん面倒くさい。

いっそ今ここで魚の餌にしてやりたいくらい面倒くさい。

気がつけば本気で魚の餌にしてやろうと剣を抜きかけたリード。

だがそれを、昔世話になった一人の老人の言葉が止めた。

その人はリードが海賊として生きていくのに必要な知識と技術を教えてくれた恩人だ。彼はカインの最初の副官で、どんなときでも彼を支えていた。

『良いかリード。あの男は本当に駄目な男だ、クソがツクほど駄目だ』

そう言って恩師が微笑んでいたのは、確か死に際のことだ。

『だがあの男はこの世界に必要だ。魔法と冒険に満ちた海と言われ

てはいるが、昔に比べりゃ世界は本当に世知がねえ。冒険も魔法もお宝も、いまや汚ねえ欲望の道具にされてる。

けどあいつはそう言うのをぶち壊せる世界で最後の馬鹿野郎だ。あいつは馬鹿だが、本気で宝探しが出来た最後の海賊だ。死の海域を越え、人魚と握手して、死霊達から宝をぶんどる。そう言う冒険が出来た最後の奴なんだよ。そう言う奴がいることで、みんな夢を持つことを諦めないでいられる。

だからリード、俺がいなくなった後はお前が奴を支えてやってくれ。そしてあいつの冒険を世界に広めてくれ、それが、世知がねえ世の中を明るく方向へ動かすことになる』

話が長い上にクサすぎます。

そう突っ込んだリードに、そう言うところがカインにぴったりだと笑い、「後は頼む」と告げたのが彼の最後だった。

笑顔で頼むと言われて、「ごめんなさい無理です」とは言えない。正直言いかけたが、それよりも先に恩師はさっさと死んでしまった。故に、リードは彼の遺言を守っている。守ってはいるが、そもそもその気もなかった上に、人にも限界はあるのだ。

確かに、恩師には世話になった。今もこうして日々を生きていくのも、彼に鍛えられ多くのことを教えて貰ったからである。

ただひとつ、恩師にも言わなかった秘密がリードにはあった。

「正直、この世界が世知が無くなるうが、私には関係ないし」

恩師が守りたかったこの世界に、リードはまったく興味がなかった。

なぜならリードは、この世界の本当の住人ではないのだから。

「わたし？」

こう言うときだけ目ざとく顔を上げるカインに何でもないと言って、リードは船長室を後にした。

7 リードの秘密 その1 〈航海士を取り巻く世界の不条理〉

リードと名乗る前の名前を、もはやリードは発音することが出来ない。

なぜならこちらの言語とリードが住んでいた「地球」の言語には大きな差異があるからだ。元の世界と類似する物や名詞も多いが、やはり差異の方がリードにとっては目につく。

そんな、地球とはまるで違うこの世界にやって来たきっかけは、今では詳細に思い出せないくらい他愛のない物だった。何の前触れもなく、朝目が覚めたらこの船の上にいたのだ。

海に漂っていた所を恩師が見つけて引き上げたのだという。

言語に関しては、発音も文字も全く違うのに難なく理解することが出来たので、状況だけはすぐに把握出来た。

それから後の日々はあまりに慌ただしくて良く覚えていないが、とりあえず簡単には帰れない事はすぐにわかった。

なぜなら、この世界にはリードの友人が多かったのだ。というか、世界規模の勢いで元の世界の住人がこちらの世界に流れ込んできているらしく、帰ったとしても元の世界に知人はいないも同然だったのである。

隣のお婆ちゃんは人魚になっていたし、親友は姫巫女として騎士の国でちやほやされている。

学校の担任は鍛冶職人になり、久しぶりに再会した母は父よりも遙かにイケメンの騎士と結婚していた。

そんななか、どうして自分は海賊なのかと思わない日はない。

正直リードは、前の世界では優秀だった。勉強は誰よりも得意で、通っていた高等学校では常に学年トップ。運動神経も良く、剣道では常に全国大会に出場するほどだ。受験戦争も勝ち抜き、来年には東京大学への進学も決まっていた。そして大学を卒業した暁には、有名新聞社で記者として働く。

それがリードが描いていた未来図であり、全ては射程距離に入っていたはずだった。

なのに、海賊である。三流大学に進学が決まった親友が姫巫女で自分が海賊。

勿論納得出来なかった。

そのくせに無駄に義理堅いため、恩師の言葉を無下にも出来ず、結局船から下りる機会も失った。

挙げ句の果て、頼りにされると調子に乗る性格と、負けず嫌いな性格が手を取り合ったお陰で、今やカインの副官にまで上り詰めてしまっている。もちろん海賊一味として指名手配までされている。

カイン以上に人生を放棄したいのは自分である。帰る世界にはもはや知り合いはおらず、むしろ皆こちらで楽しく暮らしている。

前にも進めず後にも引けず、日々の指針となる唯一の物は恩師の言葉だけだ。

「もうやめたい」

甲板に出て青い空を眺めていると、そんな思いが胸を突く。

だがやめたところで居場所はないのだ。

いつそカインみたいに右腕がフックになったら諦めもつくかも知れない、そんな阿呆な事を思ってしまった自分がまた嫌で、リードは自室へとトボトボと歩き出した。

8 リードの秘密 その2 船長が鼻血を出したわけ

「船長、あの……」

メアリーちゃんからの失恋がほんの少しだけ癒えた頃、カインの元にやってきたのはコック長だった。

「どうした」

「ちょっと気になることが……」

コック長が告げに来たのはリードのことであった。

「最近食事を残すことも多くて……。どんなに具合が悪くても完食していたデザートも、最近手を付けないし、何かの病気だったら心配だなあと」

自分も最近は船室に引きこもりきりだったので、リードを含む船員との食事はしばらくなかった。

「私が聞いてもうんともすんとも言いやしねえし、キャプテンにだつたらなにかいうかなあと」

言葉は交わしているが、近頃は事務連絡が主だった。それどころかリードの顔もロクに見ていない。

「……俺は本当に馬鹿だ」

もしリードが病を患っていたとしても、彼はそれを絶対に口にしないだろう。

拾われた負い目があるのか、リードは常にカイン達を一線を引いていた。それを見抜いた先代の航海士から、ちゃんと見てやれと言われてきたのに、今の今まで完全に失念していた。

気がつけば、カインは船長室を飛び出していた。先代のようにもしリードがいなくなったらと思うと、いても立ってもいられなかったのだ。

そのままリード専用の寝室に飛び込めば、リードは……。

「……ノック、しろって言いましたよね」

着替えの途中だった。だがその体は男と言うよりもむしろ……

「おっぱい！」

「他に言いようがあるでしょう！ それに指ささないでください！」
「おっぱい」

そしてキャプテンは、鼻血を出しながら失神した。

9 自暴自棄な酔っ払い

目が覚めたカインが始めに見たのは、机に腰掛けながらラム酒を飲んでいるリードの姿だった。

ゆったりとしたシャツの下には女のふくらみ。前々から女の様だとは思ってきたが、こうしてみると女神のような麗しさだとカインは再認識する。

「キャプテン、鼻血」

視線を向けることなく指摘され、カインは慌てて側に置かれていたハンカチを鼻にねじ込む。

「……リード君、ひとつ尋ねたいのだが」

「女ですよ」

問いよりも先に来た答えに、カインは掛けられていた毛布をはね除け、あわてふためく。

混乱しすぎて動きまでワタワタし出す35歳に呆れつつ、リードはふて腐れた。

「性別を偽っていた罪で、今すぐ海に捨てます？」

「え、何で？」

何でとくるか、そこまで馬鹿なのかと呆れつつ、リードはこの船の掟が書かれた本を彼に投げる。

「カイン海賊団の掟その5、船に女を乗せてはならない」

「あ、これノリで作った奴だから」

一時期、海賊っぽい事してみようかなって思ったこともあって。と笑うカインに、リードは逆に殺意を覚える。

「これを真に受けて3年も胸にキツイさらしを巻き続けた俺を、馬鹿だと言いたいんですね。そうなんですね」

「ち、ちがう！ お、掟は本気だ！ でもリードは別だ、女でもいい」

むしろいい、と言い出すカインに、リードはため息を重ねた。

「捨てられた方がよかったのに」

そのつぶやきに、カインは今更ながらにこの部屋に来た理由を思い出した。

「あの、なにかその、悩みとかあるのか？」

「主にキャプテンに」

「……俺が好きなのか」

真顔で言い切ったキャプテンの頭にラム酒の瓶を叩き付けるリード。

「ごめんなさい、もう言いません」

「そう言うアホなところに飽き飽きしたんです」

先ほどまで飲んでいた酒が効いたのか、リードの口からは愚痴が次々と零れ出す。

自分でもそんなことまで喋らなくても思ったが、自制するには酒をあまりすぎていた。それにたぶん、カインに胸を見られて自暴自棄になっていたのだ。

気がつけば日頃の愚痴から性別を偽る苦勞、元の世界のことから親友や家族の満ち足りた生活への不満まで、しゃべりに喋りまくっていた。

時折カインを蹴ったり殴ったり髪を掴み上げたりと、割とやりた放題をしながら。

「つまり、色々嫌になったんですよ！ 特にキャプテンのお守りに！」

「じゃあその、実は大病を患っていてとかそう言うことはないんだな」

「死んでほしいってか？」

「違う、死なれたら困る！」

「でもアレですよ、ある意味宇宙人みたいなもんですよ私。超がつく部外者ですよ、その上女ですよ」

「うちゅうじんが何か分からないが、別にリードが何であろうと構わないぞ。むしろ、いなくなったら本当に困る」

真剣な顔で言い切られ、リードは少し居心地が悪そうにラム酒を煽った。

「じゃあ、キャプテンもう少しキャプテンらしくなって下さい。そうしなきゃ、今度こそ本気で船を下りますから」

「なるなる！ リードのためなら何でもする！」

その言葉に、リードはラム酒の瓶から口を離し、そして花が咲くような笑顔を浮かべた。

これはやばい、本気で惚れると慌てて鼻に詰めた布を押さえたその直後、リードの口は開かれた。

「じゃあ、次の港で童貞捨ててください。相手は私が見繕うので」

「ま、まって！ それだけは、それだけは！」

「どうせそんな腕じゃ、健全な恋愛なんて無理ですよ」

そう吐き捨てられ、メアリーちゃんの失恋から立ち直っていないかったカインは深く傷つく。

「と言うことで、次の港で男になって貰いますから」

激しい後悔。それも今までで一番激しい後悔に、カインはしくしくと泣き出した。

10 麗しの蜜蜂亭

麗しの蜜蜂亭。

リードがカインに連れてやってきたのは、砂の海を越えた先、巨大なオアシスを有する『商人の国』にある、囲い娼婦を持つ怪しげな宿だった。

「さあ、どれが良いですか」

宿の入り口に貼られた大量の娼婦の写真の前で、リードがさっさと決めるとカインをせかす。

どれと言われても、正直どれも嫌だった。

美人揃いである。文句ないほどの美人揃いである。

けれどカインは選べない。選ぶとしたらそれは隣にいる副官を選びたいところだが、それを言ったら今度こそリードは船を下りてしまうだろう。

自分がどれほどリードに最低な男と思われているかは知っている。今更好きだと言っても絶対に無理だ。

「どれが、良いと思う？」

苦し紛れに出てきた言葉はそれで、リードには更に呆れられた。

「……じゃあ、適当に3人くらい連れてきて」

亭主にそう言うと、リードは渋るカインを引きずって2階にある客間に向かう。

「リードも、いくのか？」

「どうせ私が帰ったら逃げるつもりでしょう」

凶星であるので声が出ない。

「あ、ご心配なく。2部屋とってありますので」

「でも君女の子でしょう」

「大丈夫です、指でイカせられますから」

何が大丈夫なんだ。っていうか、そんな技をどこで身につけたんだと問いただしたいが、気がつけば客間についてしまった。

部屋には既に豪華な食事が並べられている。

「可愛い子が何人か接待しに来ますから、良い子がいたら声をかけてください。あ、何だったら全員でも大丈夫です」

お金はありますから言い切る副官に、カインは部屋の隅で膝を抱える。

覚悟を決めるしかないのは分かっている。ここで下手を打てば今度こそリードを失う。

「やれる、俺はやれる……。入れるだけだ、穴に入れるだけだ」

「キャプテン、最低な独り言が零れてます」

「今集中してるから黙ってて」

ブツブツ独り言を言い続けるカインに不安を覚えながら、リードは置いてある食事に目を向けた。

高い金を出したただけあり、砂の海の新鮮な魚をメインにした料理はどれも美味そうだった。

でもやっぱり刺身には白米と醤油が欲しいなと庶民臭いことを思いながら、リードは料理に手を付ける。

そのとき、部屋の扉が開き3人の美女が姿を現した。

美しさは勿論、身につける布の少なさに、さすがのカインも言葉を失っている。

女達は慣れた物で、カインを料理の前まで引っ張ってくると、無駄に大きな胸を揺らしながら早速彼を陥落させようと晩酌を始めた。初めからカインへの接待を優先するよう伝えていたので、リードの方は見向きもしない。

そんな計らいをしなくても、女達はカインにまわりついただろうが。なにせ相手は大海賊カインである。

「本当に男らしい。胸もたくましくて素敵だわ」

そう言ってシャツに手を入れられ、カインが必死に悲鳴を隠す。本人は戦々恐々だが、やはり彼も男。嫌ではないのは見ていて分かる。

「意外と面白くない」

もう少し馬鹿な真似をするかと思っていたのに、時間がたつに連れて女達とも普通に話し出したカインにリードは思わずこぼした。別に自分が必要ななかったじゃないかとふて腐れ、リードは酒を飲
おった。

11 船長は覚悟を決める

時がたち、夜の気配があたりを完全に支配した頃、カインは3人の娘に上着を脱がされていた。

結局一人を選べなかったのだ。と言うよりも、リードが酒を飲んで熟睡してしまったため、一人で慌てているうちにこういう展開に持って行かれてしまったのである。

女達は美しい。男の体に熱を宿す手際もしつかりと心得ている。

だが、気がつけばカインはずっとリードばかりを見ていた。

明らかに不機嫌な顔で酒を飲み、気がつけば壁に背を預けて寝息を立てているリードから目が離せなかった。

女と分かる前から、仕草やふとした瞬間に零れる言葉を可愛いと思うことはあった。そのたびに自分は男色家なのかと落ち込んだこともあった。

けどたぶん、カインは野生の勘でリードの中にある、女の部分を感じ取っていたのだろう。

今も、閉じられた目と口は側の美女より色っぽいと思うし、可能ならば彼女を寝台のある奥の部屋に連れ込みたいと本気で思っている。

でも自分の欲求を満たすことよりも、リードを失う方が怖い。昨日、酒に溺れて愚痴を吐いたリードを見てその思いは強くなった。

人を殴りながら、リードは泣いていたのだ。本人にもきつと自覚はない。でも彼女は確かに泣いていた。

この船に現れてから、リードが涙を見せることは一度もなかった。出会った当時は今よりもずっと体が華奢で、船酔いでよく倒れていたリード。しかしそのころですら、リードは泣いてはいなかった。柄の悪い男ばかりの中で心細かっただろうに、リードは泣く事よりも必死でここに馴染もうとしたのだ。

でもそれすらも不本意なのだと、昨日の涙で気がついた。

彼女がここにいる決意をしたのは、ここが気に入ったからではない。ここしか居場所がないからだ。

成り行きで海賊になってしまったとはいえ、カインは今の生活が嫌なわけではない。仲間はみな気の良い奴だし、パンだって焼ける。でもリードはそうではないのだ。

そして、カインはリードの求める物を与えてやれない。彼女を元の世界に帰すことも、彼女の家族や友人達との関係を元に戻してやることも出来ない。

なにせ、海賊としてリードを指名手配犯にしたのはカインである。ならばカインがしてやれるのはただひとつ。何が何でもリードのことを守ることだ。

そして時間はかかるだろうが、この船の良いところを気付かせてやりたい。ここにも幸せはあるのだと知って貰いたい。

自分は嫌われているから無理だろうが、仲間達はきつとリードを受け入れ救ってくれる。

だがリードがそれに気付くまで。この船のことを家だと思ってくれるまでは、リードを放り出すことはできない。

そしてそのためだったら、自分の童貞くらいここで捧げてやる。本当は嫌だけれど、相当嫌だけれど、もう女々しいことは言っていられない。女々しいことは、リードが口にすべき事なのだから。

「今夜は頼むぜ」

女達にそつと耳打ちすれば、低い声音に美女達の腰が砕ける。

「じゃあ、いっぱい楽しませてあげる」

すり寄ってきた女達にカインはついに覚悟を決めた。

だが、それをいとも簡単にひっくり返すことが起きた。

「心配しないで、気持ちよくしてあげるから」

そう言うのと、女達はカインの腕を後ろ手に縛り、素早く目隠しをする。

おいおいおい、いきなりマニアックすぎるだろう。俺にはレベルが高いだろう。

こっちははじめてなんだから、正攻法で行ってくれ。
カインの覚悟は、僅か5秒で崩壊した。

12 前にも見た光景

「で？」

カインと二人、目の前の鉄格子を眺めながらリードは呟いた。

「気付かなかったんですか？ 罨だって」

「……」

「手も縛られて目隠しもされて、腰の剣まで奪われて、どうして気付かなかったんですか？」

「だって、そう言うプレイだって思ったんだもん」

なにが「だもん」だ、いい年したおっさんの口から聞いたってイライラするだけなんだよ、このカスが。

と思うだけでなくあえて口にして、リードは目の前の鉄格子を軽く揺する。

造りは頑丈だ。リードの腕では破ることは難しいだろう。

「ごめんなさい」

落ち込む船長に、リードも今回だけはそれ以上皮肉を重ねるのをやめた。

「まあ、俺にも落ち度はありましたから」

そう言い、リードは苦しそうに胸を押さえた。それに、カインが目ざとく気付く。

「お前、顔色が悪いぞ」

「冷えるからですよ」

「違うだろ」

リードを体を乱暴に抱き寄せると、カインは胸に耳を押し当てる。脈が速いし、瞳孔も開いてる。お前まさか、毒を……」

「そこは、俺を罵るところですよ。酒に毒をしこむなんて古典的な罨にも気付かないなんて……」

「阿呆！」

そう言って、カインは着ていたコートを震えるリードの体にか

る。

「いいか、俺が怒ってるのはお前が毒に気付かなかった事じゃない！ 毒を喰らっているのにそれを言わないことだ」

死んだらどうするつもりだと、カインは激怒する。

「今すぐここから出るぞ」

「どうやって…」

「惚れた女のピンチだぞ、脱走ぐらいへでもない」

カインの言葉にリードが赤くなったことにも気付かぬ勢いで、カインはかぎ爪を鉄格子の鍵穴に突っ込んだ。

そして右腕に自慢の怪力をこめれば、轟音と共に鉄格子が壁から外れた。と言うか壁ごとはずれた。

「てっきり、鍵開けの技をお持ちなのかと」

「そのつもりだったが意外ともろかった」

鍵穴からかぎ爪を引き抜き、カインはリードの体を抱きかかえる。そのまま外へと飛び出したとき、武装した男が二人の前に立ちはだかった。

「ちょっと待ってな」

ほんの少し名残惜しそうにリードを優しく降ろし、カインは男と退治する。

相手が持つのは凶悪な大きさの青龍刀で、男は威嚇をするように、それを振りまわす。

だがカインは全く動じない。

そろどころか一瞬の隙についてカインが動き、そして勝負は決まった。

抉るようなカインの右ストレートが男の頬骨を粉碎し、青龍刀は出番のないまま床に突き刺さる。

「この勢いで女を押し倒してくれたら」

リードのつぶやきを五月蠅いとい蹴して、カインは素早く彼女を抱き上げた。

13 彼こそが海賊

牢屋のある廊下を進めば、そこに現れたのは地上へと続く階段だった。

そこは先ほどの宿の1階で、どうやらこの店には裏の顔があったようだ。

道行く従業員達を観察して、リードは思わず頭を抱えた。彼らの腕に、海賊の証であるドクロの刺青を見付けたのである。

「すいません、カスと言ったのは撤回します」

「突然どうした」

「俺の責任です、この国の周りで色々派手にやったのを忘れていました」

「じゃあ、これは仕返しか」

砂漠の海の宝を求め、近海の海賊達とやり合った記憶はまだ新しい。

普段は人目につかない航路を使うところ、さっさと事を終わらせたいと思っていたリードは、多くの船が使う最短航路を選んでこの国に入ったのだ。

一日の滞在だからと思ったが、こちらの寄港を読んで罠をはっていた輩がいてもおかしくない。

「俺のミスです」

「そんなことはどうでも良い、とにかくここを出ないと」

リードを担ぎながら人目につかないように入り口を目指すと、店の玄関前には20を越える数の男達が武器を片手に待ちかまえていた。多分、先ほどの音で逃げたのがばれたのだろう。

武器もなく、リードを庇いながらでは容易くはない数である。それに今のカインは右腕がないのだ。

「…キャプテン」

「置いて逃げろとかアホ抜かしたら、お前の腕もフックにしてやる

からな」

「冗談言ってる場合じゃないです」

「わかってる。こいつ等をさっさと倒して、すぐにお前を病院に連れて行かないとな」

それこそ冗談の極みだと呟こうとしたリードを、カインは背負った。

「本当に俺のことは……」

「俺はもう決めたんだ。お前を絶対に置いていかないし、船からも降ろさない」

「何ですかそれ」

「お前に認められるような、キャプテンになるって事だよ。それには、お前がいなきゃ話にならない」

お前の前で、今度はちゃんと男になる。…娼婦は嫌だけど、でも頑張る。

嫌々な本音が透けている所カインらしいが、お陰でリードの顔に笑顔が戻る。

「だからしっかりしがみついてろよ、派手に荒れるぜ」

広い背中とその声は、多くの人々が憧れる男の中の男、大海賊カインの物だった。

『敵に囲まれた状況からの華麗な大逆転。またしても大海賊は伝説を作った』

明日の新聞の見出しが見えた気がして、リードはこっそり微笑んだ。

その笑顔を隠しながら、いつもは頑ななリードが、ほんの少しだけ声音を和らげる。

「ここで頑張ったら、男になる件、少しだけ猶予を上げてても良いです」

「ま、マジか？」

「だからしっかり守ってくださいよ、キャプテン」

カインの頬がだらしなく歪んだことにリードは気付かない。

「今の言い方、可愛すぎるだろう！」

回れた腕の強さにテンションを上げ、大海賊カインⅡモーガンは男達の中に突っ込んでいく。

武器がないのも多勢に無勢もお構いなし。

一度火のついた大海賊を、止められる者は誰一人としていなかった。

殴り倒し、蹴り倒し、避けて殴って、また殴る。

剣を奪うとか、かぎ爪で喉をかききるような野暮な真似はしない。というより、命を奪うような戦い方は、どんなときでもカインの主義に反する。

何せ彼は、大海賊であると同時に、副官に恋するパン屋の息子なのだから。

後に伝説として語り継がれるほどの圧倒的大勝利、それはもう目の前だった。

エピローグ 船長は結婚したい

「毒が抜けてないのに、あまり無理しない方が良い」

リードの寝室から聞こえるタイプライターの音に、カインが彼女の部屋に顔を出したのは深夜のことだった。

無事敵の罠から逃げ切ったカイン達の魔法帆船は、砂の海を順調に滑り、朝には穏やかな大海へと入る予定だ。

彼らを襲ったのは、やはり以前彼らにこてんぱんにやられた近海の海賊だった。

勿論今回もこてんぱんにぶちのめした上に、彼らの持つ帆船の帆はカインがかぎ爪でズタズタにしてしまったので、追っ手の心配もないだろう。

「大丈夫です。もう終わりましたから」

タイプライターから紙を破り、それに目を落としたのはカインだった。

「まさか、お前さんが記事を書いていたとはね」

毎回毎回、どこで見ていたのかと思うほど、カイン達の行動は新聞社に筒抜けだった。新聞社なのでばれても問題はないが、割と正確な――、その上で知られたくない部分は巧妙に伏せられた記事に感心していたのだが、リードが書いていたとしたら納得だ。

「新聞社の編集長と、前の世界で縁があったんです。最初は三面記事に載せて貰うつもりで書いていたんですけど、何でも大海賊カインの記事が載ると、とぶように新聞が売れるそうで」

今や一面トップは必ずカインの記事だ。

元の世界と違ってメールやパソコンはないが、タイプライターと新聞社まで記事を運ぶ配達イルカがいれば事は足りる為、船に乗りながらも執筆は可能だ。

それに元々新聞記者になりたいと思っていた口だ。こうして彼の記事を書くことが、実は唯一の楽しみになっていたりもする。認め

たではないが。

「なんだかんだ言って、私もあなたに依存しているんですね」

タイプライターをしまいながら言えば、なぜだかカインは照れた表情で頬をかき爪でかいている。

「私にはこれくらいしか、取り柄ありませんし」

「そんな事無い、航海術だって剣術だってリードは凄い」

「並ですよ。どちらもちちらに来てから学んだ物ですし、本当のプロには敵わない」

荒くれ者ばかりだが、カインを始め海賊達は皆強くたくましい海の男だ。

それに比べて、リードは所詮もと女子高生である。

異世界での冒険譚の主人公と言えば、規格外のパワーや特殊能力を得ている物だが、そんな都合の良い奇跡はリードには起きなかった。

元々の勉強好きが幸いし、こちらの世界のことや航海術について知識を得ることは苦ではなかったが、全てを簡単にこなせたわけではもちろんない。

恩師から貰った航海に関する分厚い専門書、100冊にもなる書き取りノート、そして仕事の合間にこっそり作った暗記カード等、受験勉強で培ったノウハウと努力を駆使してようやく、今の彼女があるのだ。

だがそれだけで全てが足りるわけでは勿論ない。

やはり彼女がここにいられるのは、バルバトス号という安全な場所を作り出す大海賊カインⅡモーガンとその部下がいるからだ。

そしてそれが分かっていたから、嫌だ嫌だと言いながらカインの世話をしていたのだ。

女が得意なごさかしい根回しや気配りだけが、他の船員になくて自分にあつた唯一の物だったのだ。

馬鹿にしていたカインの強さを改めて再確認した今、改めて自分の非力と、それを認めもしないで彼の側をキープしていたごさかし

い自分が嫌になる。

「そうだ、今日はありがとうございました」

その上、出てきた礼は素っ気ないその言葉だけだ。

「いや、こちらこそもっと早く気付くべきだった」

「余裕がないのは、わかっていましたから」

だからこそフォローするつもりで来たのに、何故だか自分が揺らいだ。

本当に情けないと呟けば、カインが違う、そうじゃないと喚き出す。

この人は本当にどこまでも人が良い。

それを再確認し、それに依存する自分がまた嫌になってきた。

リードの浮かない表情に、何を勘違いしたのかカインが彼女の肩を掴む。

「つ、次は頑張るから。だからあまり凹まないでくれ。あと、船を下りるとか、言わないで欲しい」

「言ったでしょう。私もあなたに依存しています。船を下りたら行くところも、出来ることもなくなってしまう」

「ならここにいればいい。俺はお前が必要だ」

嘘はいらないと言う言いかけた瞬間、目の前にカインの顔が迫っていた。

それを手で押し止めたのは反射だった。

「何してるんですか」

「き・きす……?」

「何ですか」

「どれくらい必要か、表現しようと思って」

その言葉に頭にかっと血が上った。

「考えが胆略的すぎます。そんなアホなことしなくても、ここにいらって言ったでしょう」

「あ、アホっておまえ！俺はお前を真面目に」

「いくら童貞を卒業したいからって、身近な所で手を打とうとしな

いでください」

「違う、真面目に好きだ」

「開口一番におっぱい言ってたその口で、何を言われても信じられませんか」

怒鳴られ、追いやられ、気がつけばカインは廊下に出されていた。
「可愛いつて思ってる！ つれないところも好きだ！ 正直メアリーちゃんよりタイプだ！」

と叫ぶカインの前でドアを思い切り閉めるリード。

その顔が赤くなっている事に、彼女自身も気付かない。

「初彼氏が15も年上のおっさんなんて絶対嫌だ」

それも童貞なんて嫌だ。

そう繰り返し、リードはベッドに飛び込み頭から毛布をかぶった。
嫌だ嫌だと繰り返すうちに、気がつけば自身への不満や苛立ちは消えていた。

それに気付き、やはりあの人には敵わないと、リードはほんの少しだけカインに感謝する。

一方カインは、ドアをかぎ爪でひっかきながらも一度好きなんだと呟いていた。

勿論聞こえない。むしろ聞こえたら怒られる。

だけどそれでもやはり、何度確認してもこの気持ちに偽りは無い。

「やっぱり、結婚するならリードがいい」

言葉に出して決意して、カインはかぎ爪に誓う。

「絶対、リードを幸せにする！」

ドア越しに五月蠅いと言われ、カインは慌てて部屋の前から退いた。

そうと決まれば、とりあえずパンを焼こう。

上質なフランスパンの中に指輪を入れて、食べたら口の中から指輪がぽろり作戦だ。

絶対いい。俺なら惚れる。驚いたリードにもう一度プロポーズすれば、絶対に勝てる。

翌日、部屋の前に置かれたパンをリードが海に投げ捨てるとは夢にも思わず、キャプテンカインは鼻歌を歌いながら厨房へと向かった。

【END】

船長はドレスを着せたい（前書き）

ハロウィンの小話です。

船長はドレスを着せたい

「気持ち悪いです」

日頃から、女のようなだと讃えられるその美しい顔で。

そのうえ一点の曇りもない完璧に整った笑顔で、リードは場を凍り付けせる一言を放つ。

「あの…リード君……」

「感想を尋ねられたので答えたまでです。それとも、こんな仮装で本当に気持ち悪くないとお思いだったのですか？」

冷やかに言い放ち、若き航海士リードは仮装という名の女装をして盛り上がっていた仲間達を一瞥した。

「ハロウィンだかなんだかで浮かれるのは構いませんが、見せられるこちらの身にもなって頂きたい」

その言葉に、甲板の空気が真冬の氷河海並に下がった。その上で、更にリードは側に立つこの船の船長を見上げた。

「特に貴方は最悪です。少しは自分の強面を意識してください。大海賊カインⅡモーガンともあろう者がみつともない」

その言葉に、純白のウェディングドレスを着て縦ロールのカツラをかぶっていた強面の男がうつむく。

そして非常に残念な事に、彼こそこの船の船長であり、7つの海をまたにかける大海賊として名高いカインⅡモーガンその人であった。

「今すぐ脱いでください。あなたがこんな格好をしているなんて知れたら、この船の名誉に傷が付きます」

本当に気持ち悪くて見ていられません。ああ気持ち悪い気持ち悪い。

そう言って、船室に引っ込んでしまったリード。その背中を女装の海賊達は見送る他なかった。

「……誰だよ、ナイスアイデアって言った奴は」

ぼそりとこぼした船長の言葉は恨み辛みに満ちていて、船員達は思わず視線を明後日の方向に向けた。

ドアがノックされる音に、ベッドでふて寝をしていたリードは忌々しそうに眉をひそめる。

「用があるならどうぞ。でも船長だったら用があっても入室しないでください」

僅かな沈黙の後、ドアのすき間から物凄い負のオーラが漂ってきた。またしても忌々しそうに眉を潜めて、リードはドアを睨む。

「ドアの所からどいて貰えますか？ 気が散るんで」
途端にドアが勢いよく開き、カインがリードに詰め寄った。

さすがにドレスもカツラも取っているが、それでもその顔の破壊力は別の意味で衰えていない。

肩を怒らせて詰め寄られればさすがのリードも目を見張るほど、大海賊カインⅡモーガンは、それはそれは顔の厳つい大柄な男なのである。

まさしく海賊になるために生まれた体格と顔立ち。

むしろそれ以外の職業は無理だと言っても過言ではないほどの、ワイルドでタフな風貌なのだ。

「いくら何でも船長に向かってあれは酷い！」

だがその厳つい顔が、リードの前でみるみる崩れていく。

「男泣きはやめてください、みっともない」

「だってリードが冷たいから！」

「いつ、私が貴方に暖かい感情を向けたことが？」

「ないけど、ないけども今日は特に酷い！」

目を潤ませ、カインがリードの肩を掴む。

強面な一方で、この船長はとても繊細なのだ。

その繊細さが、彼の副官であり世話役のリードにとっては物凄く面倒だったりする。

「あんな気持ち悪い物見せられて、平然と出来る方が不思議です」

「ハロウィンくらい、羽目を外しても良いじゃないか！」

「羽目ならいつも外してるでしょ」

「でも今日は特別だ！ お菓子も焼いたし、ケーキも焼いたし、パンも焼いたんだぞ！」

「だからそれ、いつもの事じゃないですか」

何せ海賊でありながら、カインの趣味はパンを焼くことなのだ。故にリードが目を離すと、1日中剣も振らずにパン生地をこねているのがカインである。

凶悪な顔に生まれた故にうっかり海賊家業に足を突っ込んでいるが、カインは元々パン屋の息子。

その上本人は未だにパン屋に戻りたい。むしろ戻れると思っているから、リードには更に面倒くさがられている。

「今日はカボチャのクリームを使ったパンを焼いたんだ！ リードは絶対気に入る」

「ならここに持ってきてください」

「みんなで騒ぎながら食べるのが良いんだろう」

ハロウィンなんだし、と言いきるカインにリードは痛む頭を押さえた。

「残念ですが、私の故郷ではハロウィンを祝う風習はないので」

本当は馬鹿みたいに騒いでいたが、勿論それは言わない。

「でも去年は一緒に酒を飲んでくれただろう？」

「あんな気持ち悪い集団の中は絶対嫌です」

「入る前から毛嫌いするなよ。お前も女装して中に入れば、きっと楽しい」

「女装ねえ」

そう言って視線を下げて、リードは眉をひそめる。

気がつけば、カインは後ろ手に一着のドレスを持っていたのだ。

それは先ほど彼が着ていた物ではない。

明らかに自分に着せるために持ってきた、上質な黒いロングドレスである。

「……船長」

静かに口を開き、リードがどこか冷ややかな笑顔を浮かべる。

「そう言えば去年は、仮装何てしませんでしたよね？　それがどうして今年は？」

「あついやつ、それは……」

わざとらしく視線をそらしたカインに、リードの唇が美しく歪んだ。

「それもいきなり女装だなんて、おかしいですよね」

「いや、そのっそんなことは……」

どもる船長の顎を掴み、リードは彼の視線を無理矢理自分へと向けさせる。

どこか艶めかしい指の動きと、吐息がかかるほど近づいてきたリードの顔に、カインが真っ赤になった。

とはいえ勿論、彼はゲイでもホモでもない。

「……みんなに話したんですか、私が女だって？」

その事実、つい先日カインがリードの裸をうっかり見てしまった幸運……ではなく不運と共に発覚した物だった。

そしてそれ以来、カインはどうにかしてリードを女らしくしようと色々と画策している。

「別に話したくて話した訳じゃ」

「でも、話したんですよね？」

「……はい」

カインが隠し事が下手なことは知っている。

だがそれでも、リードはカインをはいそうですかと許すわけにはいかない。

「まさかとは思いますが、わざわざ女装をしたのは私にこのドレスを着せるためだったりしませんよね？」

カインが黙ったので、リードが彼の頬に爪を立てる。

「しませんよね？」

「だっ、だって…リードのドレス姿を見たいってみんなが言うから！」

「みんな？」

「…みんなと、主に俺が」

その直後、リードはカインの手からドレスを奪い、それをビリビリに引き裂いた。

「ああっ！ わざわざ買ったのに！」

「じゃあ返品します」

そう言って破ったドレスをカインの腕に押しつけ、リードは微笑む。

だがさすがに、この暴挙にはカインも怒る。

まあ怒ると言っても、子どもが騒ぐような物ではあるが。

「どうして君はそう頑ななんだ！ 海賊の掟は、あれはノリで作った奴だから気にするなと言ってるだろ！」

元々リードが男装をしていたのは「船に女を乗せてはいけない」というルールがあったからだ。

そしてそれを守るためにリードが男装をしていたのは事実だが、もう3年近く男で居たのに、いまさら女らしくしろと言われても正直困るのだ。

だがそこら辺のことをカインに理解しろと言っても無駄だろう。

そう勝手に見切りを付けているリードは、説明よりもさらに手っ取り早い解決法を取ることにした。

「とにかく君はもう我慢することはない！」

「だから女らしくしろって？」

そう言うリードの顔は冷たく、しかしどこか色気に満ちていて、カインはびくりと体を震わせる。

「船長がそう命令するなら構いませんが、本当に後悔しませんか？」
唐突に、カインの体が側のベッドに倒れる。いや、倒される。

それにカインが気付くと同時に、彼の上に馬乗りになるリード。ただそれだけのことなのに、カインの頭は真っ白になった。

そして何と、リードは自分のシャツのボタンを外し始めたのだ。

その上胸を隠す為に巻いたサラシを見せるように、リードはシャツを大きくはだけさせる。

「リリリリリッリード君!？」

「欲しいんでしょ、私が？」

耳元で囁かれて真っ赤になっているカインの前で、リードがナイフを抜き、サラシを切り裂いた。

大きい。

そんな身も蓋もない感想を抱くカインの前で、リードのたわわな胸が揺れる。

何とかシャツに収まっているが、今にも零れそうなその大きさに、カインは……。

「…限…界……」

気絶した。

それも、鼻血をだらしがなく垂れ流しながら。

「ちよろいな」

冷ややかな言葉と共にシャツのボタンをしめ、それからベッドの上に倒れているカインを一瞥する。

今すぐたたき出したいが、鍛えているとはいえリードの細腕でカインを廊下まで引きずるのは不可能だ。

うっかり海賊になったにしては、彼の体は鍛えられている。

その理由が仲間を守るためだと、そしてその思いを貫くほどの実力がある事は知っているが、だからといって他の仲間のようにカインを闇雲に尊敬するには、リードは擦れすぎていた。

「う……うう……おっぱい……が……」

その上異性の目から見たら、35にもなって女の胸ごときで失神している童貞船長なんて、尊敬したくもない。

むしろ色々面倒くさいとげんなりしながら、リードはカインの体

から離れる。

それからリードは、床に落ちている裂いたドレスを拾い上げた。今更だが、黒いフリルが印象的なそのドレスはリード好みのデザインだった。

と言うか前にどこかで見たなと記憶をたぐり寄せて、彼女はハッとするとする。

たしかこの前の寄港地で、こっそり眺めていた物だ。

頑なに男装を貫いているが、別に女らしい格好が嫌いではない。故に彼女は時折人目を忍んで、時々このようなドレスが売られている店をウィンドウショッピングするのが趣味だった。

けれどこの前は、運悪く船長に見つかったのだと思いだし、それからリードは僅かに後悔する。

「ちよっと、着てみたかったな……」

勿論誰もいない場所です。むろんカインの目が絶対にはない場所です。

ほんの少しの後悔を引きずりつつ、リードはそのドレスをこっそりとタンスの中にしまった。

後日、タンスの中のドレスが、縫い目の見えない魔法の糸で縫い合わせられたのはまた別の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6734t/>

船長は恋がしたい

2011年10月31日03時27分発行